

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2010-1231

(P2010-1231A)

(43) 公開日 平成22年1月7日(2010.1.7)

(51) Int.Cl.	F 1	テーマコード (参考)
A 6 1 K 8/31 (2006.01)	A 6 1 K 8/31	4 C 0 8 3
A 6 1 K 8/89 (2006.01)	A 6 1 K 8/89	
A 6 1 K 8/34 (2006.01)	A 6 1 K 8/34	
A 6 1 K 8/84 (2006.01)	A 6 1 K 8/84	
A 6 1 Q 19/10 (2006.01)	A 6 1 Q 19/10	

審査請求 有 請求項の数 4 O L (全 13 頁)

(21) 出願番号	特願2008-159940 (P2008-159940)	(71) 出願人	000001959
(22) 出願日	平成20年6月19日 (2008. 6. 19)		株式会社資生堂
(11) 特許番号	特許第4274491号 (P4274491)		東京都中央区銀座7丁目5番5号
(45) 特許公報発行日	平成21年6月10日 (2009. 6. 10)	(74) 代理人	100149294
			弁理士 内田 直人
		(74) 代理人	100137512
			弁理士 奥原 康司
		(72) 発明者	木村 友彦
			神奈川県横浜市都筑区早渕2丁目2番1号
			株式会社資生堂リサーチセンター (新横浜) 内
		Fターム(参考)	4C083 AA112 AB051 AC011 AC012 AC022
			AC102 AC111 AC112 AC122 AC302
			AC421 AC422 AC582 AD112 AD151
			AD152 AD172 AD642 CC23 DD23
			EE03 EE07

(54) 【発明の名称】 クレンジング化粧料

(57) 【要約】 (修正有)

【課題】メーキャップを肌からすみやかに除去し、かつ塗布時に手からのたれ落ちや顔上でたれることがなく、肌に塗布しやすく、すっきりと洗い流せることでさっぱりとすることができるクレンジング化粧料を提供する。

【解決手段】(1) 1～15質量%のシリコーン油分、(2) 1～15質量%の揮発性炭化水素油分、(3) 5～20質量%の2価グリコール、(4) 5～40質量%のポリオキシエチレングリセリル脂肪酸エステル、及び(5) 15～88質量%の水を含有し、前記(1)シリコーン油分と(2)揮発性炭化水素油分との重量比(1)/(2)が0.3～3の範囲内にあり、25℃における粘度が100～500 mPa・sであるクレンジング化粧料。

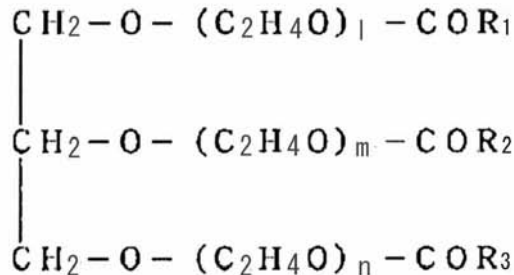
【選択図】なし

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

- (1) 1 ~ 15 質量 % のシリコーン油分、
 (2) 1 ~ 15 質量 % の揮発性炭化水素油分、
 (3) 5 ~ 20 質量 % の 2 価グリコール、
 (4) 5 ~ 40 質量 % の下記式：

【化 1】



10

(式中、 R_1 、 R_2 、 R_3 のうち少なくとも 1 つは炭素数 14 ~ 22 の飽和又は不飽和の高級脂肪族炭化水素基であり、その他は水素原子を表わす。また、 l 、 m 、 n は整数である) で表わされるポリオキシエチレングリセリル脂肪酸エステル、及び

- (5) 15 ~ 88 質量 % の水、

を含有し、前記 (1) シリコーン油分と (2) 揮発性炭化水素油分との重量比 (1) / (2) が 0.3 ~ 3 の範囲内にあり、25 における粘度が 100 ~ 500 mPa・s であることを特徴とするクレンジング化粧料。

20

【請求項 2】

前記 (1) シリコーン油分が、環状ポリシロキサン及びフェニルメチルポリシロキサンから選択される 1 種または 2 種以上からなることを特徴とする、請求項 1 に記載のクレンジング化粧料。

【請求項 3】

前記 (2) 揮発性炭化水素油分が、イソドデカン及びイソヘキサデカンから選択される 1 種または 2 種からなることを特徴とする、請求項 1 に記載のクレンジング化粧料。

【請求項 4】

前記 (4) ポリオキシエチレングリセリル脂肪酸エステルが、モノエステル体であり、かつ 1 分子中の酸化エチレンの平均重合度が 6 ~ 20 であることを特徴とする、請求項 1 に記載のクレンジング化粧料。

30

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、メーキャップ、特にマスカラ等の落ちにくいメーキャップに対する高い洗浄力を有し、メーキャップを肌から速やかに除去できるとともに、使用時にたれ落ちなどがなく、肌に塗布しやすく、すっきりと洗い流せるクレンジング化粧料に関する。

【背景技術】

40

【0002】

メーキャップクレンジングにおいては、肌に塗布しやすく、メーキャップを肌から速やかに除去することが望まれる。一般に、メーキャップクレンジングに用いられるクレンジング化粧料は、拭き取りタイプと洗い流しタイプの 2 つに大別される。特に、マスカラや口紅といったオイルを主成分とするメーキャップを簡便に除去する際には拭き取りタイプが用いられていた。

【0003】

拭き取りタイプとは、ティッシュやコットンにクレンジング化粧料をなじませ、その溶解作用でメーキャップを浮かせて拭き取る方法である。クレンジング化粧料に含まれる油分の溶解作用の高さがメーキャップクレンジング力を左右するため、配合する油分の選定が重要

50

である。このタイプのクレンジング化粧料として、例えば、イソパラフィン炭化水素と鎖状ジメチルポリシロキサンとその他油分を配合した非水系のクレンジング料が提案されている（特許文献１）。

【０００４】

しかし、ふき取りタイプのクレンジング化粧料は、使用後のティッシュやコットンがゴミとなる問題があり、オイルのみからなる製剤は水で洗い流すことができずに肌に油分が残るため、さっぱりとした気持ちよさを得ることはできない。

【０００５】

こうした問題を解消するため、オイルを洗い流せるようにした基剤がある。これらは、液状油分を５０％以上含み、油分中に界面活性剤を配合したものであり、水で洗い流す際に、界面活性剤が油分を乳化して水洗性が付与されている。これら製剤は一般にクレンジングオイルといわれている。いわば、拭き取りタイプに洗い流しタイプの特徴を付加したものである。

【０００６】

このようなクレンジングオイルの具体例として、液状油分と液状ないしペースト状の非イオン界面活性剤、及び０．１～２．０重量％の水配合した製剤（特許文献２）、液状油剤６０～８５重量％と非イオン界面活性剤混合物、及び１２重量％以下の水を配合した製剤（特許文献３及び４）等が提案されている。クレンジングオイルは、拭き取りタイプと同様に、油分と界面活性剤が全体の殆どを占め、水の配合量が少ないことが特徴である。

【０００７】

しかし、多量の油分を含むクレンジングオイルは塗布時に油っぽさを感じて不快であり、油分を水で洗い流す際に生じる乳化物が粘性を有しているため、肌上でぬるぬるした感じを生じて不快でもあった。また、上記したような組成のクレンジングオイルは、１００ｍPa・s以下、通常は７０ｍPa・s以下の低粘度の液状であるため、塗布するために手にとる際や塗布した顔上でたれ落ちるので塗布しにくいといった問題があった。

【０００８】

クレンジングオイルの油っぽさを解消するために、油性成分と水溶性の溶媒とのバランスを取らせた等方性一液相の洗浄剤組成物も提案されており（特許文献５）、油性及び水性の汚れを何れも除去できるとされている。

しかしながら、これらの洗浄剤組成物では、油っぽさは低減されるものの、製剤の粘度は低く、クレンジングオイルに見られたたれ落ちの問題は解決されない。また、ラウリル基やテトラデシル基と親水性物質のエステル体やエーテル体やラウリルアルコール、ラウリン酸を配合しているため、目に入ると痛みがあるといった安全性、使用感の問題があった。

【０００９】

一方、たれ落ちを改善し、塗布しやすい製剤として、ジェル状態のクレンジングジェルやクリーム状のクレンジングクリームがある。クレンジングジェルとはアクリル系増粘剤、水溶性多糖類系、寒天、セルロース系増粘剤などで製剤の粘度を高めて油分を分散したものである。こうした方法により、塗布時の手や顔からのたれ落ちを防ぎ、なじませやすくする方法が提案されている。（特許文献６～９）。

【００１０】

しかしながら、こうした高分子系増粘剤を使用した場合は、水ですすいだときに肌上でのぬるつきがあるため不快であるという問題を生じていた。

また、クレンジングクリームは、Ｏ／Ｗ型の乳化状態にすることで粘性を出し、塗布時の手や顔からのたれ落ちを防ぎなじませやすくするものであるため、メーキャップを油分に溶解させるためには、乳化を破壊して油分を放出させなければならず、そのためのなじませに時間が掛かり、素早くメーキャップを落とすことが困難であった。また、粘度が高いため皮膚上の毛穴や皮溝のこまかな部分の汚れが除去しにくいという問題もあった。

【００１１】

このように、従来から様々なタイプのクレンジング化粧料が提案されているものの、た

10

20

30

40

50

れ落ちがなく肌に塗布しやすく、メーキャップを肌からすみやかに除去し、すっきりと洗い流せるクレンジング化粧料は未だ得られておらず、その開発が望まれていた。

【 0 0 1 2 】

【特許文献 1】特開平 1 - 2 1 1 5 1 3 号公報

【特許文献 2】特開平 3 - 1 6 1 4 2 8 号公報

【特許文献 3】特開 2 0 0 4 - 2 3 8 3 7 6 号公報

【特許文献 4】特開 2 0 0 4 - 2 6 7 9 1 号公報

【特許文献 5】特開 2 0 0 4 - 2 1 7 6 4 0 号公報

【特許文献 6】特開昭 6 2 - 1 3 5 4 0 6 号公報

【特許文献 7】特開平 9 - 1 1 0 6 3 8 号公報

【特許文献 8】特開平 9 - 2 4 9 5 2 0 号公報

【特許文献 9】特開平 9 - 2 4 9 5 2 2 号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【 0 0 1 3 】

本発明は上記従来技術の課題に鑑みて行なわれたものであり、メーキャップを肌からすみやかに除去し、かつ塗布時に手からのたれ落ちや顔上でたれることがなく、肌に塗布しやすく、すっきりと洗い流せることでさっぱりとすることができるクレンジング化粧料を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【 0 0 1 4 】

本発明者らが鋭意研究を重ねた結果、シリコーン油分と揮発性炭化水素油分を特定比率で含有し、さらに 2 価グリコール、モノイソステアリン酸ポリオキシエチレングリセリルと水を含み、かつ特定の粘度範囲にあるクレンジング化粧料が、上記の課題を悉く解決できることを見出し、本発明を完成するに至った。

【 0 0 1 5 】

すなわち、本発明は、

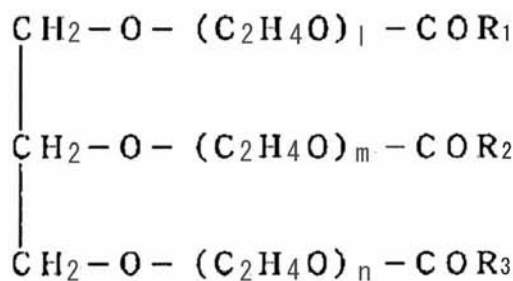
(1) 1 ~ 1 5 質量 % のシリコーン油分、

(2) 1 ~ 1 5 質量 % の揮発性炭化水素油分、

(3) 5 ~ 2 0 質量 % の 2 価グリコール、

(4) 5 ~ 4 0 質量 % の下記式：

【化 1】



(式中、 R_1 、 R_2 、 R_3 のうち少なくとも 1 つは炭素数 14 ~ 22 の飽和又は不飽和の高級脂肪族炭化水素基であり、その他は水素原子を表わす。また、 l 、 m 、 n は整数である) で表わされるポリオキシエチレングリセリル脂肪酸エステル、及び

(5) 15 ~ 88 質量 % の水、

を含有し、前記 (1) シリコーン油分と (2) 揮発性炭化水素油分との重量比 (1) / (2) が 0.3 ~ 3 の範囲内にあり、25℃における粘度が 100 ~ 500 mPa・sであることを特徴とするクレンジング化粧料を提供する。

【発明の効果】

【 0 0 1 6 】

本発明に係るクレンジング化粧料は、使用時の手からのたれ落ち、顔上でのたれ落ちが

なく、肌に塗布しやすく、すっきりと洗い流せることでさっぱりとすることができるものである。また、本発明のクレンジング化粧料は洗浄力が高く、目がしみるなどの刺激が小さく、その機能面及び安全面でも優れている。

【発明を実施するための最良の形態】

【0017】

本発明に係るクレンジング化粧料に用いられるシリコーン油分（前記成分（1））は、揮発性シリコーン油分、不揮発性シリコーン油分のいずれでもよく、従来から化粧品等に使用されているものから適宜選択することができる。

【0018】

揮発性のシリコーン油分としては、例えば、デカメチルテトラシロキサン、ヘキサメチルジシロキサン、ドデカメチルペンタシロキサン等の鎖状シリコーン油（鎖状ポリシロキサン）、ヘキサメチルシクロトリシロキサン、オクタメチルシクロテトラシロキサン、デカメチルシクロペンタシロキサン、メチルポリシクロシロキサン等の環状シリコーン油（環状ポリシロキサン）等が挙げられる。

10

【0019】

不揮発性シリコーン油分としては、例えば、ジメチルポリシロキサン、フェニルメチルポリシロキサン、メチルヒドロジェンポリシロキサン、ポリエーテル変性シリコーン、アルキル変性シリコーン、高級脂肪酸エステル変性シリコーン、高級アルコキシ変性シリコーン、フェノール変性シリコーン、フッ素変性シリコーン、架橋型オルガノポリシロキサン等の変性シリコーン油などが挙げられる。

20

【0020】

限定されるものではないが、シリコーン油分の中でも、デカメチルシクロペンタシロキサン、フェニルメチルポリシロキサンがメイククレンジング力の観点から特に好適である。

本発明では、上記したような揮発性及び／又は不揮発性のシリコーン油の1種を用いても、2種以上を用いてもよい。

【0021】

本発明のクレンジング化粧料におけるシリコーン油の配合量は1～15質量％であり、好ましくは2～10質量％である。配合量が1質量％未満では、メイククレンジング力が十分でなく、15質量％を超えて配合すると、なじませ時に油っぽい感じが強くなり不快であり、また洗い流しのすずぎ感の点でも良好でない。

30

【0022】

本発明に係るクレンジング化粧料に用いられる揮発性炭化水素油分（前記成分（2））は、化粧品等に従来から使用されているものから適宜選択される環状もしくは鎖状の炭化水素油であり、単独もしくは混合物で配合してよい。不揮発性の炭化水素油は肌に残存しやすく、すずぎがさっぱりしないことから、またタオルドライ後の感触が油っぽく優れないことから、本発明のクレンジング化粧料では、揮発性炭化水素油を用いることが重要である。

【0023】

本発明で利用できる揮発性炭化水素油としては、例えば、イソパラフィン類をあげることができる。イソパラフィン類の具体例としては、軽質イソパラフィン、軽質流動イソパラフィン、重質流動イソパラフィン、流動イソパラフィン、水添ポリイソブテン、イソヘキサデカン、イソドデカン等が挙げられる。これらの中でもイソドデカン、イソヘキサデカンがメイククレンジング力の点で特に好適である。

40

【0024】

本発明のクレンジング化粧料における揮発性炭化水素油の配合量は1～15質量％であり、好ましくは2～10質量％である。配合量が1質量％未満ではメイククレンジング力が十分でなく、15質量％を超えとなじませ時に油っぽい感じが強くなり不快感があれわれ、また洗い流しのすずぎ感の点でも良好でない。

【0025】

50

一般的なメーキャップ化粧料、例えばファンデーション、口紅及びマスカラ等は、シリコーン油分と炭化水素系油分とを含有している場合が多く、このようなメーキャップをクレンジングするには、これらの油性成分を良好になじませ得ることが重要なため、シリコーン油分と炭化水素油分（揮発性）の両方を含んでいる本発明のクレンジング化粧料は、これらのメーキャップの洗浄に特に有効である。

【 0 0 2 6 】

本発明のクレンジング化粧料においては、前記シリコーン油分と揮発性炭化水素油分との重量比（シリコーン油分 / 揮発性炭化水素油分）が 0.3 ~ 3、より好ましくは 0.5 ~ 2 の範囲内とされ、これにより優れたメーククレンジング力が発揮される。この比率が 0.3 より小さい又は 3 より大きい場合にはクレンジング力が低下し、すすぎ後のさっぱり感が得られない傾向がある。

10

【 0 0 2 7 】

本発明に係るクレンジング化粧料における 2 価グリコール（前記成分（3））は、限定されないが、例えば、1,3-ブチレングリコール、1,4-ブチレングリコール、2,3-ブチレングリコール、2,3-ジメチル-2,3-ブチレングリコール、ジプロピレングリコール、エチレングリコール等から選択される 1 種又は 2 種以上である。

【 0 0 2 8 】

本発明における 2 価グリコールは、組成物の粘度調整、洗浄後の肌へのマイルドさの付与、及び組成物の安定化といった役割を果たしていると考えられる。

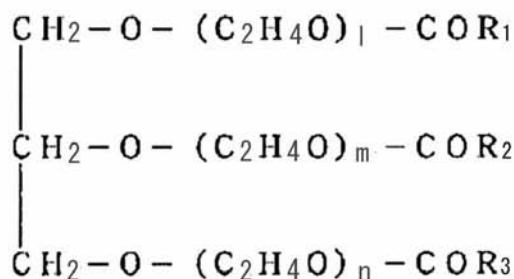
本発明のクレンジング化粧料における 2 価グリコールの配合量は 5 ~ 20 質量%であり、好ましくは 5 ~ 15 質量%である。配合量が 5 質量%未満では粘度が低くなり、洗浄後の保湿性が低くなる。20 質量%を越えると組成物の安定性が悪くなる傾向がある。

20

【 0 0 2 9 】

本発明に係るクレンジング化粧料に用いられるポリオキシエチレングリセリル脂肪酸エステル（前記成分（4））は、下記式で表わされるものから選択される。

【化 2】



30

（式中、 R_1 、 R_2 、 R_3 のうち少なくとも 1 つは炭素数 14 ~ 22 の飽和又は不飽和の高級脂肪族炭化水素基であり、その他は水素原子を表わす。また、 l 、 m 、 n は整数である。）

【 0 0 3 0 】

本発明では、前記式のポリオキシエチレングリセリル脂肪酸エステルの中でも、モノエステル体（即ち R_1 、 R_2 、 R_3 のうちの 1 つが脂肪族炭化水素基であり、残りの 2 つが水素原子であるもの）が特に好ましく、ポリオキシエチレンの平均重合度（ l 、 m 、 n の平均値）は 6 ~ 20 であるものが好ましく、7 ~ 10 であるものが更に好ましい。これらのものを選択すると、メーククレンジング力及び洗い流し時のさっぱり感が更に向上する。

40

【 0 0 3 1 】

具体例としては、モノイソステアリン酸ポリオキシエチレン（8）グリセリル、モノイソステアリン酸ポリオキシエチレン（10）グリセリル、モノイソステアリン酸ポリオキシエチレン（20）グリセリル、ヤシ油脂肪酸 PEG（7）グリセリルなどが挙げられる。

【 0 0 3 2 】

50

本発明のクレンジング化粧料におけるポリオキシエチレングリセリル脂肪酸エステル配合量は5～40質量%であり、好ましくは20～35質量%である。配合量が5質量%未満では洗い流し時のすすぎが悪くなり、40質量%を越えると肌や目への刺激を感じる場合がある。

【0033】

本発明のクレンジング化粧料は、上記成分(1)から(4)に加えて15～88質量%、好ましくは30～70質量%の水(前記成分(5))を含有する。水の配合量が15%未満であると使用時のさっぱりした感触、塗布時のみずみずしい感じが得られにくくなる。配合量が88質量%を越えるとメイククレンジング力が低下する。

【0034】

本発明のクレンジング化粧料は、その全体の粘度が25で100～500mPa・sに調整されている。粘度が100mPa・sより小さいと塗布時に手からたれ落ちる、顔上でたれ落ちるなどの使用上の問題が生じ、500mPa・sを超えると肌表面の細かな凹凸に基剤が入りこみにくくなるためメイククレンジング力が低下し、また塗布感触が重くなる。

【0035】

本発明に係るクレンジング化粧料には、必須成分である前記成分(1)～(5)以外に、本発明の効果を損なわない範囲で界面活性剤を配合してもよい。本発明に用いられる界面活性剤の種類は特に限定されるものではなく、アニオン性界面活性剤、カチオン性界面活性剤、両性界面活性剤、非イオン性界面活性剤から適宜選択できる。

【0036】

さらに、界面活性剤以外にも、化粧料や医薬品に通常用いられる成分を、本発明の効果を損なわない範囲で配合することができる。

配合可能な成分としては、例えば、保湿剤、粉末成分、液体油脂、固体油脂、ロウ類、炭化水素油、高級脂肪酸、高級アルコール、合成エステル油、天然水溶性高分子、半合成水溶性高分子、合成水溶性高分子、増粘剤、紫外線吸収剤、金属イオン封鎖剤、低級アルコール、多価アルコール、単糖、オリゴ糖、多糖、アミノ酸、有機アミン、高分子エマルジョン、pH調製剤、酸化防止剤、酸化防止助剤、防腐剤、消炎剤、美白剤、各種抽出物、賦活剤、血行促進剤、抗脂漏剤、抗炎症剤等が挙げられる。

【実施例】

【0037】

以下に本発明の実施例を挙げてさらに詳しい説明を行うが、本発明はこれらに限定されるものではない。なお、本明細書における配合量は、特に断らなければ質量%を表すものとする。

下記の実施例1～5及び比較例1～11(表1～3)に記載した組成のクレンジング化粧料を調製し、各クレンジング化粧料のメイククレンジング力、洗浄後のすすぎ後のさっぱり感、外観安定性、粘度、目の痛みについて評価した。評価結果を表1～3に併せて示す。

【0038】

各項目は、以下の評価基準に従って評価した。

(A)メイククレンジング力

各実施例及び比較例のメイククレンジング力について、専門パネラー10名により実使用試験を実施した。落とす対象のメーキャップとしては、落ちにくいと表記されている市販のマスカラ3種類を用いた。評価基準は以下の通りであり、この評価点を平均化した。

5点：十分落ちている。

4点：ほぼ落ちている。

3点：普通。

2点：やや落ちていない

1点：落ちていない

【0039】

10

20

30

40

50

(B) すすぎ後のさっぱり感

各実施例及び比較例のクレンジング化粧料を用いてメーキャップを洗浄し、水ですすいだ後のさっぱり感について、専門パネラー 10 名により実使用試験を実施した。評価基準は以下の通りであり、この評価点を平均化した。

5 点：さっぱり感がある

4 点：ややさっぱり感である

3 点：普通

2 点：ややさっぱり感がない

1 点：さっぱり感がない

【0040】

10

(C) 外観安定性

25 の透明性を 2 cm 角の立方体容器に各製剤を入れて横から目視し、均一な一層であり、容器を透けて向こう側の見えるものを透明（安定している）と判断した。

○：透明

×：不透明（2 層以上の状態を含む）

【0041】

(D) 粘度

各実施例及び比較例のクレンジング化粧料の粘度について、ブルックフィールド型粘度計を用いて 25 で測定したときの粘度値を次のように分類した。

測定値が 100 ~ 500 mPa・s の場合：○

20

測定値が 100 mPa・s 未満または 500 mPa・s を超えた場合：×

【0042】

(E) 目の痛み

各実施例及び比較例のクレンジング化粧料を 20 名に実使用してもらい、目の痛みを訴えた人が 1 名でもいた時を × とし、1 名もいなかったときを ○ とした。

【0043】

【表 1】

	実施例	比較例	比較例	比較例	比較例	比較例
	1	1	2	3	4	5
イオン交換水	残部	残部	残部	残部	残部	残部
ジプロピレングリコール	10	10	10	0	10	10
デカメチルシクロペンタシロキサン	10	0	10	10	10	10
イソドデカン	10	10	0	10	10	10
モノイソスアリン酸 PEG8 グリセリル	30	30	30	30	0	0
モノラウリン酸 PEG12						30
揮発性炭化水素油／シリコーン油	1	0	∞	1	1	1
メーククレンジング力	4.8	2.6	2.4	4.2	2.5	4.2
すすぎ後さっぱり感	4.8	3.4	3.6	3.8	2.6	3.8
外観安定性(透明性)	○	○	○	×	×	○
粘度	○	○	○	×	×	×
目の痛み	○	○	○	○	○	×

30

40

【0044】

50

上記表 1 に示されるように、シリコーン油分と揮発性炭化水素油油分が配合されていない比較例 1、比較例 2 のクレンジング化粧料は、メイククレンジング力が劣っており、それによってすっきりとした使用感は得られなかった。

一方、2 価グリコールを配合しない比較例 3 のクレンジング化粧料は、メイククレンジング力が劣り、外観安定性が悪く、保湿性も低かった。またモノイソステアリン酸ポリオキシエチレングリセリルを配合しない比較例 4 はメイクを落とすことができず、ラウリン酸 PEG 12 を配合した比較例 5 は目の痛みがあり不適切であった。

【 0 0 4 5 】

【表 2】

	実施例 2	実施例 3	比較例 6	比較例 7
イオン交換水	残部	残部	残部	残部
ジプロピレングリコール	10	10	10	10
デカメチルシクロペンタシロキサン	3	1	1	0.5
イソドデカン	1	3	0.5	1
モノイソステアリン酸 PEG8 グリセリル	30	30	30	30
揮発性炭化水素油／シリコーン油	3	0.33	2	0.5
メイククレンジング力	4.2	4.2	3.4	3.6
すすぎ後のさっぱり感	4.2	4.2	3.4	3.4
外観安定性(透明性)	○	○	○	○
粘度	○	○	○	○

10

20

30

【 0 0 4 6 】

上記表 2 に示されるように、シリコーン油分、揮発性炭化水素油分の配合量が 1 % より少ない比較例 6、比較例 7 のクレンジング化粧料は、メイククレンジング力が劣っており、すっきりとした使用感は得られなかった。

【 0 0 4 7 】

【表 3】

	実施例 4	実施例 5	比較例 8	比較例 9	比較例 10	比較例 11
イオン交換水	残部	残部	残部	残部	残部	残部
ジプロピレングリコール	10	10	10	10	10	10
デカメチルシクロペンタシロキサン		10	10	2	10	10
フェニルメチルポリシロキサン	10					
イソドデカン	10		2	10	10	10
イソヘキサデカン		10				
モノイソステアリン酸 PEG8 グリセリル	30	30	30	30	3	50
揮発性炭化水素油／シリコーン油	1	1	5	0.2	1	1
メイククレンジング力	4.8	4.8	3.8	3.8	3	4.4
すすぎ後のさっぱり感	4.6	4.6	3.8	3.8	2.8	4.6
外観安定性(透明性)	○	○	○	○	×	○
粘度	○	○	○	○	○	×
目の痛み	○	○	○	○	○	×

【0048】

上記表 3 に示されるように、シリコーン油分と揮発性炭化水素油分の重量比が 3 より大きい又は 0.3 より小さい比較例 8、比較例 9 のクレンジング化粧料は、メイククレンジング力が劣っており、すっきりとした使用感は得られなかった。

また、モノイソステアリン酸ポリオキシエチレングリセリルの配合量が 5 質量%より少ない比較例 10 はメイククレンジング力が劣っており、また 30 質量%より多い比較例 11 は粘度が高すぎ、目の痛みを感じる場合があることがわかった。

【0049】

(実施例 6)

以下の組成のメーキャップクレンジング化粧料を調製した。

成分	配合量 (質量%)
水	残部
イソドデカン	5 %
イソヘキサデカン	2 %
流動パラフィン	0.5 %
デカメチルシクロペンタシロキサン	5 %
フェニルメチルポリシロキサン	3 %
グリセリン	0.5 %
ジプロピレングリコール	5 %
1,3-ブチレングリコール	7 %
イソステアリン酸 PEG8 グリセリル	30 %
アルコール	3 %
クエン酸	0.1 %
クエン酸ナトリウム	0.5 %
保水アミノ酸	0.1 %

緑茶エキス	0 . 1 %
西洋ハッカエキス	0 . 1 %
イリス根エキス	0 . 1 %
カモミラエキス	0 . 1 %
アスコルビン酸グルコシド	0 . 1 %
L - セリン	0 . 0 5 %
キレート剤	適量
酸化防止剤	適量
香料	適量

【 0 0 5 0 】

(製法) イオン交換水中に、上記各種成分を室温で混合してクレンジング化粧料を得た。上記実施例 6 のクレンジング化粧料はメーククレンジング力に優れ、すすぎ後にさっぱりした感触を与え、安定性に優れ、手からのたれ落ちがなく、優れた使用感触を有していた。

【 手続補正書 】

【 提出日 】平成20年10月21日 (2008.10.21)

【 手続補正 1 】

【 補正対象書類名 】明細書

【 補正対象項目名 】0 0 1 4

【 補正方法 】変更

【 補正の内容 】

【 0 0 1 4 】

本発明者らが鋭意研究を重ねた結果、シリコーン油分と揮発性炭化水素油分を特定比率で含有し、さらに2価グリコール、ポリオキシエチレングリセリル脂肪酸エステルと水を含み、かつ特定の粘度範囲にあるクレンジング化粧料が、上記の課題を悉く解決できることを見出し、本発明を完成するに至った。

【 手続補正 2 】

【 補正対象書類名 】明細書

【 補正対象項目名 】0 0 4 8

【 補正方法 】変更

【 補正の内容 】

【 0 0 4 8 】

上記表 3 に示されるように、シリコーン油分と揮発性炭化水素油分の重量比が3より大きい又は0 . 3より小さい比較例 8、比較例 9 のクレンジング化粧料は、メーククレンジング力が劣っており、すっきりとした使用感は得られなかった。

また、モノイステアリン酸ポリオキシエチレングリセリルの配合量が5質量%より少ない比較例 1 0 はメーククレンジング力が劣っており、また4 0 質量%より多い比較例 1 1 は粘度が高すぎ、目の痛みを感じる場合があることがわかった。

【 手続補正書 】

【 提出日 】平成21年1月27日 (2009.1.27)

【 手続補正 1 】

【 補正対象書類名 】特許請求の範囲

【 補正対象項目名 】全文

【 補正方法 】変更

【 補正の内容 】

【 特許請求の範囲 】

【 請求項 1 】

- (1) 1 ~ 1 5 質量%のシリコーン油分、
- (2) 1 ~ 1 5 質量%の揮発性炭化水素油分、
- (3) 5 ~ 2 0 質量%の2価グリコール、

(4) 5～40質量%のイソステアリン酸ポリオキシエチレングリセリル、及び
(5) 15～88質量%の水、
を含有し、前記(1)シリコーン油分と(2)揮発性炭化水素油分との重量比(1)/(2)が0.3～3の範囲内にあり、25℃における粘度が100～500mPa・sであることを特徴とするクレンジング化粧料。

【請求項2】

前記(1)シリコーン油分が、環状ポリシロキサン及びフェニルメチルポリシロキサンから選択される1種または2種以上からなることを特徴とする、請求項1に記載のクレンジング化粧料。

【請求項3】

前記(2)揮発性炭化水素油分が、イソドデカン及びイソヘキサデカンから選択される1種または2種からなることを特徴とする、請求項1に記載のクレンジング化粧料。

【請求項4】

前記(4)イソステアリン酸ポリオキシエチレングリセリルが、モノエステル体であり、かつ1分子中の酸化エチレンの平均重合度が6～20であることを特徴とする、請求項1に記載のクレンジング化粧料。

【手続補正2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0014

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0014】

本発明者らが鋭意研究を重ねた結果、シリコーン油分と揮発性炭化水素油分を特定比率で含有し、さらに2価グリコール、イソステアリン酸ポリオキシエチレングリセリルと水を含み、かつ特定の粘度範囲にあるクレンジング化粧料が、上記の課題を悉く解決できることを見出し、本発明を完成するに至った。

【手続補正3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0015

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0015】

すなわち、本発明は、

(1) 1～15質量%のシリコーン油分、
(2) 1～15質量%の揮発性炭化水素油分、
(3) 5～20質量%の2価グリコール、
(4) 5～40質量%のイソステアリン酸ポリオキシエチレングリセリル、及び
(5) 15～88質量%の水、
を含有し、前記(1)シリコーン油分と(2)揮発性炭化水素油分との重量比(1)/(2)が0.3～3の範囲内にあり、25℃における粘度が100～500mPa・sであることを特徴とするクレンジング化粧料を提供する。

【手続補正4】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0029

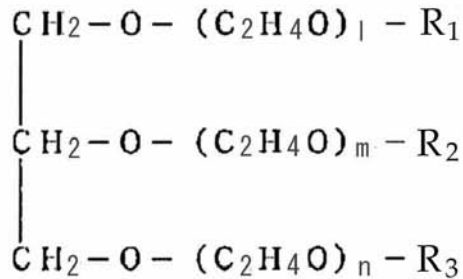
【補正方法】変更

【補正の内容】

【0029】

本発明に係るクレンジング化粧料に用いられるイソステアリン酸ポリオキシエチレングリセリル(前記成分(4))は、下記式で表わされるものから選択される。

【化 2】



(式中、 R_1 、 R_2 、 R_3 のうち少なくとも1つはイソステアリル基であり、その他は水素原子を表わす。また、 l 、 m 、 n は正の整数である。)

【手続補正5】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0030

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0030】

本発明では、前記式のイソステアリン酸ポリオキシエチレングリセリルの中でも、モノエステル体が特に好ましく、1分子中の酸化エチレンの平均重合度は6～20であるものが好ましく、7～10であるものが更に好ましい。これらのものを選択すると、メイククレンジング力及び洗い流し時のさっぱり感が更に向上する。

【手続補正6】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0031

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0031】

具体例としては、モノイソステアリン酸ポリオキシエチレン(8)グリセリル、モノイソステアリン酸ポリオキシエチレン(10)グリセリル、モノイソステアリン酸ポリオキシエチレン(20)グリセリルなどが挙げられる。

【手続補正7】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0032

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0032】

本発明のクレンジング化粧料におけるイソステアリン酸ポリオキシエチレングリセリルの配合量は5～40質量%であり、好ましくは20～35質量%である。配合量が5質量%未満では洗い流し時のすずぎが悪くなり、40質量%を越えると肌や目への刺激を感じる場合がある。